

短大生のプレゼンテーション実習における知識や スキル獲得のプロセス

辰 島 裕 美

目次

はじめに

1 「プレゼンテーション」授業の概要と調査の経過

2 分析の結果

2-1 社会人基礎力を指標にした結果

2-2 能力が向上した意識

2-3 気づき・理解・学びのプロセス

①回数

②人のプレゼンテーションを見る

③先生

④キャリア教育のテーマ

3 結論と今後の課題

おわりに

キーワード

「キャリア教育」、「プレゼンテーション」、「社会人基礎力」、「ICT」

はじめに

短期大学のプレゼンテーション実習では学生自身がどのような力が高まったと自覚したのだろうか、また得られた知識や高まったスキルは、どのような活動から、どのようなプロセスを経て得られたのだろうか。それを明らかにするために、3年間にわたり半期の科目が終了した後、学生の意識調査を行い、また、自己評価やレポートから、該当する記述を抜き出す調査を行った。1回目の調査の結果、「傾聴力」、「実行力」が高まったことがわかり、2回目の調査から「人のプレゼンテーションを見て」「たくさんの発表を聞いて」などから「気付いた」「わかった」「学んだ」と自覚したことがわかった。さらに3回目の調査で、学生は15回の授業の進行に概ね正比例する形で意識やスキルが向上したと振り返っていたことがわかった。また、学生の記述から、15回の授業でどのように気持ちに変化したかをつかむことができ、教員や周囲との関わりなどからも学び成長していることが

わかった。この3年間の調査を通して、プレゼンテーションの実習がどのようにして学生に教育効果をもたらしたかを述べる。

1 「プレゼンテーション」授業の概要と調査の経過

調査の対象である授業は、星稜女子短期大学のキャリア教育科目の「プレゼンテーション」で、2年次前期に配置の必修科目である。講義要項には、「目標を達成するためのプレゼンテーション資料の作成スキルを高める」および、「コミュニケーションを意識したプレゼンテーションを行う」の2点を授業の狙いとしてあげている。つまり、プレゼンテーション資料の作成スキルとは、ソフトウェアの機能である効果などの種類を知るのではなく、対象と目的にあった表現の仕方そのものを身につけることを意味する。聴衆とのコミュニケーションを意識したプレゼンテーションを目指し、コミュニケーションを汎用的能力の一つとして獲得することが目的である⁽¹⁾。そこで、キャリア開発に関するテーマを設定し、その内容を情報収集して考え、まとめることによって学び、それをプレゼンテーションして相手に訴える機会を経験することで、テーマと体験、および学生相互の相乗効果が期待できる授業展開を行った⁽²⁾。これらは繰り返すことで成長が自覚できると考え、15回の授業で文書を5点、プレゼンテーションファイルを3点作成提出とした。学生にとっては締め切りに追われる、なかなかハードな科目であったようだ。また、メールでの課題提出は3回あったが、実社会でのICTの利用の仕方について、一般常識やマナーも添削した。次の表1で授業の概要を示す。

表1 授業の内容

授業時数	主な内容
1	自己アピール文・メールのルール
2	デザインとレイアウト解説
3	自動プレゼンファイル制作
4	相互評価・学習のまとめの文書
5	アニメーション解説・小論文
6	マスタ解説・プレゼンファイル制作
7	発表練習
8～9	ミニ発表会1
10	小論文
11	プレゼンファイル制作
12～13	ミニ発表会2
14, 15	グランプリ大会

2009年度の授業後アンケートでは、経済産業省が提唱する「社会人基礎力」⁽³⁾を指標として、学生に対して「プレゼンテーション授業の前と後では、自分がどう変化したか」を自己評価させた。学生は全体的に社会人基礎力が上昇したとし、最も高まった力は「傾聴

力]であった。この結果を踏まえ、2010年度には、自分が発表する実習であるプレゼンテーションでなぜ能力が高まったのかを調査した。課題であるレポートには、自分の考えの根拠を示してあり、この部分からどうしたらよいプレゼンテーションができるのか、できるようになっていったのかを知る手掛かりが得られた。それは、他人の発表をたくさん見たことによって能力が向上したことがわかった。そこで、2011年度には、15回の授業の進行中、どの段階で、どの課題のどの活動で、意欲や能力の変化があったのかを調べた。レポートから得られたものは個人で様々であったが、授業の進行では、概ね回数を重ねながら向上しているという意識であった。本稿では、この3年間の調査によって、プレゼンテーション実習による能力獲得のプロセスを詳細に述べる。

2 分析の結果

2-1 社会人基礎力を指標にした結果

2009年度の授業の最終回、学習のまとめの文書を作成した後、社会人基礎力の変化を問うアンケートを依頼し、当日の出席者131人が回答した。

アンケートの実施に際し「社会人基礎力」の12要素について簡単に説明し、授業の前とプレゼンテーションを学んだ後では、それぞれの要素で自分の能力がどのように変化したかを、変化なしは「0」、能力が高まった・能力が下がったについて、度合いはそれぞれ3段階で、「+1・+2・+3」、「-1・-2・-3」の該当するところにマークする方法で実施した。

表2 授業前後の変化と周囲との比較 (%)

社会人基礎力	授業前後の変化			周囲との比較		
	高まった	変化なし	下がった	優 秀	同 等	劣 る
主体性	86.3	11.5	2.3	15.3	58.0	25.2
働きかけ力	56.5	42.0	1.5	8.4	46.6	43.5
実行力	90.8	8.4	0.8	16.0	63.4	19.1
課題発見力	84.7	14.5	0.8	13.0	67.2	18.3
計画力	78.6	19.8	1.5	10.7	70.2	17.6
創造力	67.9	29.8	1.5	12.2	55.0	31.3
発信力	85.5	12.2	2.3	10.7	48.1	38.2
傾聴力	92.4	6.9	0.8	36.6	52.7	9.2
柔軟性	82.4	16.8	0.0	23.7	66.4	8.4
状況把握力	74.8	24.4	0.0	16.8	74.8	6.9
規律性	78.6	20.6	0.8	32.8	58.8	6.9
ストレスコントロール力	56.5	40.5	3.1	16.0	68.7	13.7

N=131

アンケートの結果は表3のとおりである。学生が最も高まったと回答した要素が「傾聴

力]であった。131人の回答のうち121人92.4%の学生が、高まったと回答した。次いで「実行力」は119人90.8%、「主体性」は113人86.3%と続いている。プレゼンテーションの授業では、聞く立場と発表をする立場があり、さらに事前調査や小論文の記述などそれぞれのシーンで養成される要素も変化する。いろいろな作業で、各自で与えられたテーマから自分の主題を見つけさせていることから「主体性」が、また、実際に指定された文字数を満たして課題を完成させたりするなどの経験から、「実行力」が高まると感じられたようである。また、学生の感想からわかったことであるが、半期の授業で頻繁にレポートやプレゼンテーションファイルなどの提出があるため、期限を順守させたことが、学生にとってこれまでにない厳しいと感じた意見が多く見られた。その関連で「規律性」の回答が高くなったと考えられる。

本来、学んだ後に能力が下がるということはあまり考えられないが、今回の調査では、高まったとこととバランスをとるために能力が下がったという項目を調査票に提示した。ところが、ストレスコントロールでは3.5%の学生が下がったと回答した。この解釈として、レポートの提出期限を守ることやプレゼンテーションで人の前に出て緊張することが、プレッシャーとして感じられ、負の意識として下がったと回答したのではないかと考える。すべてを平均すると、高まったと回答したのは78.0%、変化なしは21.0%、下がったのは1.3%であった。全体として、8割近く向上しているという意識であることが結果として得られた。プレゼンテーションの実行は、学生にとって「社会人基礎力」の向上を意識できる授業として成果がある。

変化した能力について過度の自己満足や劣等感に陥らないように、客観的な指標として他と比較して自分はどうかという質問を設けた。表2では右に示した。変化した結果の自分は、クラスメートと比較して客観的にみると、どうであるかを答えさせたものである。全体的に「同等」という回答が多い。「傾聴力」、「柔軟性」、「規律性」は、授業の前後で高まり、なおかつ他と比べて「優秀」である比率が高い。「発信力」、「創造力」は高まったが「劣っている」と意識している。「働きかけ力」は、「劣っている」という意識が一番高く、授業の後に「高まった」という意識は「ストレスコントロール」と同じ値で他項目よりも最も低くなっている。プレゼンテーション実習で直結する項目として、「発信力」と「働きかけ力」に注目すると、自分で発表することができたので、「発信力」は高まったが、発信した結果は、他を巻き込むほどの「働きかけ力」には自信がなく、他と比較して「劣っている」とする率が高いと考えられる。

このように学生が能力の変化を意識したのはこの意識調査を行ったからであり、調査をしなければ、特に社会人基礎力の向上を自覚するチャンスはない。社会人基礎力がどのようなことかを講義により理解しても、それを評価するテストは記憶によるものとなりがちである。意識調査だけでは身についたり能力が向上したりする証拠にはならないが、活動の後に振り返ることによって意識はできる。

2-2 能力が向上した意識

2010年度の授業後「プレゼンテーション能力」、「文章能力」、「コミュニケーション能力」、「社会性」の4項目に対して授業によって能力が高まったかどうかを、短い文の自由記述で回答を求めた。150名の学生が回答した。はじめの2項目は授業で直接的に指導したものであり、後の2項目はキャリア教育の要素として、授業を継続していく中で、総合的に獲得してほしい能力や性質である。この4項目に対する自己評価のコメントを全体的に眺めた後おおよその分類として「無変化」、「意識した」、「理解できた」、「向上した」、「判別不能」というキーワードを抜き出して集計した結果が表3である。「プレゼンテーション能力」と「文章能力」は、授業で何度も経験させ、添削指導も行ったので回数を経て向上や改善が自覚できたようである。プレゼンテーションの授業であるが、文章を書かせる回数も多く、こちらも、個別に改善点を指摘したのでこの2項目は類似した結果になったと考えられる。また、「コミュニケーション能力」と「社会性」が同様の結果となった。この2項目については、向上したという学生は半数にとどまっている。そもそも、「社会性」や「コミュニケーション能力」といっても幅が広く、具体的に何を意味するのかが、学生にとってはとらえにくかったということも考えられる。能力が向上するところまでは到達せず、「重要だと気がついた」、「学ぶことができたがまだ実行できていない」、という表現も見られた。

コミュニケーション能力が向上したとする学生は4項目の中では一番少なく、全体のちょうど50%にあたる75名であるが、中には、「授業で学んだことをアルバイトで試してみた」（3名）、「日常生活や普段の友人との人間関係でも活用している」（1名）、「ゼミの活動で役立てている」（1名）と、授業以外の時間や場所で学んだことを活かしているとする記述があった。

表3 コメントのキーワードの出現回数による集計（件）

	プレゼンテーション	文章	コミュニケーション	社会性
無変化	4	8	11	8
意識した	5	6	21	23
理解できた	7	7	39	40
向上した	134	120	75	77
判別不能	4	9	6	8
合計	154	150	152	156

N=150

2-3 気づき・理解・学びのプロセス

「傾聴力」が高まった理由について、2010年度に調査した。「よいプレゼンの条件」について記述した最終課題のレポートには、自分が学んだことやなぜそう考えるようになって

たか、という根拠も書かせたので、学生がどのようにして気づき、学び、理解したり身につけたりできたかがうかがえた。提出されたレポートのすべての記述の中から、学びのプロセスが直接記載されている部分を抜き出して、テキスト化を行った。このとき、何を学んだかという点については限定せず、まずは「気付いた」、「見習った」、「反省した」、「わかった」、「考えた」、「できた」、「よくなった」などの向上や改善や学びを表す言葉に注目した。次に、その言葉の付近に「何から学んだ」、「どうやって身につけた」という記述や内容がある部分を、簡潔にしてテキスト化した。150人のレポートから200近い内容を抜き出した。この結果から使われた頻度の高い言葉を取り上げ、出現頻度を分析した。中には授業を通して自分がどのように気づき、自己意識を改革したのかを連綿と綴った感想文を提出した学生もあり、この分析結果と合わせて、学生が授業でどのように変化していったかがよくわかった。

プレゼンテーションや文章を書くことについて、実際に授業で回数を重ねて実習したため、大多数の学生は「1回目よりも2回目が改善した」、「2回目は慣れた」、「1回目で反省したことを2回目で実行できた」という表現で自己評価をしていた。そこで、最終のレポートからこのように頻出する言葉を取り上げて、出現回数とその順序や前後の関係を調べた。

圧倒的 majority は実習回数の記述で、「回を重ねるごとに」、「1回目よりも2回目が」というものであり120件、また「人のプレゼンテーションを見て」、「たくさんの人のプレゼンテーションを聞いて」という内容も97件と多かった。ついで、「自分でやったらわかった」、「実際にやってみることで学べた」というものが56件あったが、その記述の中には、聞く側と発表者側との「立場」に関する記述が18件あった。人のプレゼンテーションを見て自分でもやってみて、2つの「立場」双方を体験する過程で得られた学びであろう。予想外であったが「先生」という記述も35件と多かった。この「先生」は、合わせて感情に関する表現が付随しており、「褒められて嬉しくなって自信がついた」、「注意されて次はしっかり取り組んだ」など、感情から行動を変化させている内容が多かった。「テーマ」に関する情報収集の過程で知識を得たり学んだりした記述が26件であった。次にその詳細を述べる。

① 回数

1回目・2回目という回数に関する記述の後には、「反省」、「気付く」、「見習う」、「考える」、「わかる」という言葉が続いた。そして、1回目で「人の良い点」や「自分の欠点」が「わかり」「反省し」、「考え」、「アドバイスを受け入れ」、2回目で「改善した」、「上達した」、「向上した」、「克服した」という経過の記述が多かった。2回目で同様なプロセスが繰り返され、また、最終のグランプリ大会で代表者の優れたプレゼンテーションから得たものがあつたと記述する学生も多い。また、授業の初期で人の前で発表する前に、

自動プレゼンテーション⁽⁴⁾の動画を作成して学生が相互評価をしているが、そこで評価されたことを土台としているケースもあった。「改善」、「向上」などの単語は記述の最後のほうに位置し、結果を表している。「わかって反省した」、「反省して見習った」、「学んだのでできた」、「がんばってやったことで学べた」など、繰り返して複数の記述があるキーワードもあった。また、「気付いて反省した」と「反省して気付いた」などのように語順が逆になることも多く見られた。学び方や気付いて自分のものにしていくプロセスの表現は人によって様々である。

心理的な動揺が安定したことは「回数をこなすとどうやっていいかわかるようになった」、「2回目は緊張が治まった」などの記述からわかった。中には、クラス全体の傾向として「1回目の先生のアドバイスを、2回目ではちゃんと取り入れている人が多かった」と広い視野で見ている学生もいた。「1回目の反省点は克服したが2回目は別の課題が見えた」など、確実にステップアップしている様子もあった。また、「次はがんばろうと思えた」と意欲が高まったという記述も多い。次に進む時に、情熱が下がったという学生は一人もなく、回数を重ねることによって興味関心が高まったかあるいは持続しているとわかった。これは、2011年度の意識や学びが、授業を進めるごとに高まっていったという結果と一致した。回数を重ねて高まったことの要因は3つあると考える。1つはクラスメートのプレゼンテーションを見ること、2つ目に教員の係わり、3つ目にキャリア教育のテーマである。

② 人のプレゼンテーションを見る

回数を重ねることには、発表の回数ともう一つ、「人のプレゼンテーションを多く見る」という要素がある。約150人の学生を4つのクラスに分けているので、自分が1回発表することは、40人弱のプレゼンテーションを見聞きすることになる。人の発表を見て学ぶミニ発表会では、各自のパソコンにログインはさせない。次回の自分の発表に役立てることに、最終回のレポートの参考資料になるように、よく見て気付いた点のメモを取るよう指導している。

分析から、上手なプレゼンテーションを見てあこがれ、「次は自分もあんな風に」と感じていることがわかった。また、「たくさん見ると、よいものと悪いものが分かるようになった」というように、いくつも見ると必然的に良い例と悪い例を見ることになり、それらを比較している。人の姿を見て気がついたことを、自身と比較して自分はできているだろうかどうだろうと顧みている。このプロセスでは、人と人、人と自分のレベルに気がつく表現も多かった。「人のプレゼンを見る」、「たくさんの人の話を聞く」ということは、学んでいるキャリア開発のテーマについて様々な意見を知ることにもなり、テーマの解釈、表現などの多様性を記述する学生も多かった。これによって、キャリア開発のテーマを深めるとともに、「個性」に注目して興味を広げ、人の意見を聞くことの重要性にも気がつ

いている。

聞くことと発表することの2つを経験しているため、双方の「立場」を記述する学生も多かった。「自分でスライドを作っていると詳しく説明したくなるが、実際に長い文章を見せられると、見る側としては・・・」、「発表は緊張するので下を向いてしまうが、聴衆を見ていない発表者は・・・」というように、自分の発表経験と人の姿を見て、よいプレゼンテーションを研究している。「自分に難しかったことをきちんとやっている人は、十分リハーサルをして努力をしたのであろう」と分析している記述もあった。「自分が発表している時に聴衆が何をしているかまでよく見えた」という記述も複数見られた。いつもは授業で先生の話をして座って聞く学生だが、逆に話し手として教壇に立つと、先生からはどのように見えるかがわかる。この時に、聴衆がうなずいてくれたことや、真剣に聞いてくれない姿を見て、話す立場を理解した学生もいる。よいプレゼンテーションの条件に、聴衆の態度を要素としてあげている学生が散見された。本来、視聴者の態度はプレゼンターの責任によるところが大きいが、そこまで学びきれていないか、あるいは目の前で展開しているプレゼンテーションの空間を俯瞰的に捉えているのかもしれない。「人を見ること」の中に「いろいろな人のたくさんのプレゼンテーションを良くも悪くも手本として学ぶ」ということと、「発表者と聴衆の2つの立場を経験してわかること」が存在した。これらの経験から、「傾聴力」が最も高まったと意識したものと考える。

③ 先生

調べた結果、想定以上に多かったのが「先生」という言葉であり、学生は指導者から少なからず影響を受けていることがわかった⁵⁾。「褒められてやる気が出た」、「アドバイスを参考になった」というものが中心である。「先生」に関することはいずれも感情的言葉があるという点で共通している。最頻出は「褒められた」ことで、意欲が高まっていることである。文の誤記やスライドの改善点をどんどん指摘して、よりよいものになるようにアドバイスするが、単に誤りの注意や欠点の指摘だけではなく、「こうするとよくなる」ということがわかるので喜ばしい気持ちになるのであろう。

プレゼンテーションは、はじめからうまくできる学生は稀なので、未熟な短所を指摘せず、声のトーンや背筋が伸びているなど小さなことでも、好感としてとらえられることを具体的に本人に告げている。「自分では気がつかない長所を教えてくれた」、「自信を持っていいとわかった」などという記述があった。「先生が見てくれているので本気で取り組んだ」とあったが、文の添削やアドバイスはもちろん、課題提出メールの確認の返事でも、学生は教員の反応や返事、何か一言の評価を待っているのではないだろうか。他に「先生が学生を大人扱いしてくれた」という学生も3人いた。学生は社会人から見ると未熟であるが、生徒ではないのだから、学生でも大人としての責任やあるべき姿を自覚してゆくべきである。それを教えるのもキャリア教育の一部と考える。

「先生が厳しい」、「注意されて反省した」という記述もあったが、オリエンテーションから厳しく言ったのは課題提出の締め切りである。提出物の締め切りを過ぎても連絡のない学生には、授業中に個別に理由を聞き、理由しだいでは社会において期限を守ることの重要性を伝えた。キャリア教育では、人生の先輩として見過ごせないこともある。また、学生として課題を出さないことは叱責した。それは、やってみることによって興味が出て意欲が湧き、学びと成長の実感を得られるのであるから、課題に取り組まないことには何も成長しないからである。

④ キャリア教育のテーマ

『「資格取得」について調べて自分の考えを持ち、ミニ発表会で友達のいろいろな意見を聞くことで学んだ』、「テーマで学んだことが直接プレゼンテーションに活かせた」、「テーマからプレゼンテーションを、プレゼンテーションからテーマを学んだ」という漠然とした記述が多い。一方、「テーマで第一印象について調べて考えたが、みんなのプレゼンテーションを見ていても、『第一印象』が重要だと改めて気がついた」、「グランプリ大会の発表者のよいプレゼンテーションは、言語だけが伝わるのではなく、発表の仕方がよい。それはテーマで学んだ『ノンバーバルコミュニケーション』そのものだ」といった具体的な内容に触れた記述も見られた。これらの記述からは、文字通り「身をもって体験」することから、気づきや発見の感動や納得を経て自己の内部に学びとして収めているようだ。つまり、ここでは自分一人の活動から、「人のプレゼンテーションを見る」ことや実際に相手が存在する活動が強く関連している。他には、「テキストで学んだこと」、「先生が言っていたこと」、「ゼミの活動」、「アルバイトで気をつけていること」など授業中の勉強やそれ以外の活動の場面と、「コミュニケーション」や「社会性」というテーマの結合を記述している。

『「社会性」という言葉の意味も知らなかったが友人の発表から社会へ出るのに必要なものだとわかった』、「テーマについて調べて発表し、他の人の意見を聞くことで自分では気がつかなかったことに気付け、とても勉強になった」「テーマを学んで自分を見つめ直すことができ、多くの人の意見を聞くことで多くのものを得ることができた。」という記述から、学生が相互に知識を共有して学んでおり、キャリア教育としての効果があることもわかる。

3 結論と今後の課題

短大生の記述からは、「回数を重ねること」、「人のプレゼンテーションを見ること」、「テーマ」などから身をもって学ぶことが多く、また、「先生」から褒められたりヒントやサポートを得たりすることによって自信を高め、意欲的に取り組んだことがわかった。それに加

えて、学校生活や日常生活、アルバイトなどの経験で、他者、とりわけ大人との関わりも関連して考えた学生も少なくない。回を追って意欲や能力が高まっていく様子は大多数の傾向であったが、レポートから得られた詳しい内容からは、まさに学びのプロセスは十人十色ともいえる。特徴的な2人の感想文に共通することは「先生」であった。一人は最も優秀な学生であり、意欲が高まるきっかけは「先生が自分を大人として扱ってくれた」と書いた。また、素行や授業の態度も芳しくない学生は、「先生に厳しく注意され、社会性について友達の発表を聞き、これまでの自分は社会性が足りなかったと気がついた」と書いた。これらは、全体に向けた一斉指導からではなく、個別の対応で感じたことであろう。教室で大勢に対して授業をしても、それぞれの背景が違うように、受け取り方も成長のプロセスも様々であった。

2010年度の高等学校における普通教科「情報」でのプレゼンテーション実習の同様の意識調査では高校1年生の生徒は社会人基礎力の中で「実行力」が最も高まったという結果であった。観察から、短大生と比較すると高校生は他の生徒の発表をよく見ていないという事実がある。自分の発表が気になって、人の発表を見る余裕がないのである。人の発表を見ることができず、他から学ぶことが少ない高校生は、自分が調べたことを話すだけで一方通行であり、結果として自分の学びの中に終始している。これに対して短大生になると聴衆を意識できているという違いが見られた^[4]。

筆者はかねてより、情報教育を単なるパソコンスキルや操作教育にしないために、テーマが重要であるとし、キャリア教育を取り上げて、情報教育と同時に展開することで汎用的な能力を追求することが可能であると考えていた^[5]。情報リテラシー教育の中のプレゼンテーション実習の授業で、キャリア教育のテーマを学ぶことも、キャリア教育でプレゼンテーションの実習を行うことも、枠組みが違うだけで同様に学ぶことができる。今回、高校生のプレゼンテーション授業と比較することができたが、キャリア教育は非常に幅が広いので、たとえば、コミュニケーション能力のどの点に有効であるか、今後はさらに詳しく研究する必要がある。

おわりに

レポートを書くときにパソコンがなかった筆者自身の学生時代を考えると、半期で4回の文書を提出し、3回のプレゼンテーションを行うことは能力的にも時間的にもできなかった。現在、学生がこのような学びの自覚とともに達成感を得ることができたのは、半期という短期間で繰り返して3～4回プレゼンテーションを行い、延べ約140回のプレゼンテーションを見ることが可能であったからに他ならない。これを可能にしたのは、ICTの進歩による。

しかし、人間の脳は、コンピュータの制御記憶装置の高性能化・大容量化の技術革新の

ように日進月歩ではない。学生も多くの課題をこなすことは大変だが、教員も添削指導は時間的に大変な仕事である。特にキャリア教育の指導の面においては、効率を重視できないのではないだろうか。いくら見立てのいい名医でも、患者とのコミュニケーションで効率を重視すれば、患者はその医者を信頼できないのと同じである。学校というコミュニティでは、学生がよい学校生活を送れる環境を作るために、教職員が良好な土台を作り上げなくてはならない。トロウの言う「エリート時代」^[6] は、学生が大学教授から知識やスキルを学び取っていたが、キャリア教育が義務化となった現在の大学では、学生にかかわる大人が、手本を見せて褒めたり間違いを正したりして、丁寧に育てていく必要がある。学生が授業やゼミ、部活動や学内外の行事など、年齢や立場の違う人とコミュニケーションをとることは、経験となって社会性を高めていくことにつながる。このことを教職員が意識し、学生に対して経験を積んでいく過程を通して、コミュニケーション能力を高めることが隠れた任務である。

[注]

- (1) 鈴木の研究に「プレゼンテーションの過程は、単なる情報伝達ではなく、関連する様々な他者との関係の中で、聴き手の埋めこまれている社会関係を繋ぎかえて、再構成する作業だということになる。」とある。参考文献^[1]
- (2) 綾は「学校のプレゼン教育は作文教育を踏まえたものであるべき」と論文の中で論じている。参考文献^[2]
- (3) 「社会人基礎力」とは、2006年1月に経済産業省(2006:1)の「社会人基礎力に関する研究会」が「職場や地域社会の中で多くの人々と接触しながら仕事をしていくために必要な能力」と定義したもの。
- (4) この自動プレゼンテーションとは、Microsoft社のPowerPointの機能の一つを指す。各スライドに表示時間を設定しておき、この機能を使って上演すると、止めるまで繰り返して上演され、授業の中で効率的に相互評価を行う際に利用できる有効な機能である。
- (5) 土橋は論文で大学教育力の構成要素として「教員」の学生への影響度合いが大きいと述べている。参考文献^[3]

参考文献

- [1] 鈴木栄幸・加藤浩、2008、「プレゼンテーションの対話的構成過程に関する事例研究」メディア教育研究第4(2):pp53-70
- [2] 綾皓二郎、2008、「プレゼンテーションソフトウェアの認知スタイルと使い方に関する情報教育学的検討」2008PCC論文集:pp82-85
- [3] 土橋信夫、2011、「大学の学士力と学士力形成に関する一研究—学士力アンケートによる大学教育力の検証の試み—」、大学アドミニストレーション研究、創刊号、pp.11-24
- [4] 辰島裕美、2011、「情報モラルをプレゼンテーションで深め学ぶ—『ひと目でわかる最新情報モラル』で情報社会の歩き方がわかる—」、ICT・Educationフォーラム情報教育、2011No.47、pp1-5
- [5] 辰島裕美、2011、「高等教育における情報系のビジネス資格取得の目的—問題点とキャリア教育による補完—」CIEC研究会論文誌、vol.2、pp69-73
- [6] トロウ、M.1976、『高学歴社会の大学—エリートからマスへ—』東京大学出版会、pp35